The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	カルメン・ラフォレー : 人と作品
Author(s)	森本, 久夫
Citation	Estudios Hispánicos. 1972, 2, p. 69-84
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97874
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

カルメン・ラフォレー

―人と作品―

森　本　久　夫

1

セルセディーリャ
1970年9月8日

モリモト・ヒサオさま

11日金曜にマドリーに行きます。もし，だめだという言伝のない場合，オドンネル街38番地7階右側の自宅で午後4時から5時までの間お待ちします。そこの私の電話番号は2740127です。

かしこ
カルメン・ラフォレー

追伸　なにかの都合で来られない場合，あるいはこの手紙があなたの許に間に合わなくて私に連絡できなくても結構です。そうしたことはよく起ることです。とにかく，お互いにお会いできなかったとしても，あなたが私に関心をもって下さったことを非常に感謝しております。

私のマドリー滞在中のこと，ある事情があってバルセローナのある出版社を訪れた際，住所を教えられてカルメン・ラフォレーに手紙を出したが，私の滞在期間も残り少くなって半ばあきらめていた8月末に，マドリーの北にあるセルセディーリャから封書がとどいた。それにはそこに滞在中で，マドリーにおらなかったため，私の手紙を見なかった事情が説明されていた。早速，私はまだマドリーにいること，訪問していい日時を教えていただきたい旨手紙を出した。冒頭の手紙はそのとき受取った返事である。私信を勝手に公表するのははばかられるが，カルメン・ラフォレーという作家の人柄がこの短い書簡の中にも，特に追伸の部分の心くばりにはっきりと浮び出ていると思われるのでここに写しとった。

オドンネル街はシベレス広場を東へ抜けてレティロ公園の北側に沿って

行くとすぐだった。エレベーターを下りてすぐ目の前のドアーの呼びリンを鳴らすと，小柄な中年の女性がドアーを開けるなり，顔一面に微笑をたたえて「私がカルメン・ラフォレーです 。どうぞ，どうぞ」と招じ入れてくれた。私を車で送ってきてくれた野口君という青年も一緒だったが，彼女は私に向うなり，「あなたがセニョール・モリモトですね。おはよう」と「おはよう」の部分は日本語で言って私たちを面くらわせた。というのは時刻はさきに写した 手紙に 指示された とおり 午後だったからである。「おはよう」というのは午前中の挨拶ですと言うと，彼女は笑いながら，それは知っているが，アメリカ合衆国に行ったとき同行した日本人から教えてもらって以来，日本人に会うと，まず「おはよう」ということにしているとのことだった。彼女のこの「おはよう」が「オハイオ」からきていることは彼女の「北緯35度」の中で語られている。[1]

私たちが招じ入れられた部屋は９月の午後の陽の光を受けて明かるかった。本棚には本が溢れ，壁には大小さまざまな絵がかかっていた。ここしばらく，ここに住んでおらず，今日一日帰ってきただけなので片づいていないとしきりに弁解されるのだが，私には物はそれぞれその場所におさまっていて，とても居心地のよい部屋に思えた。ブランディを出されたが駄目であるというと，コーヒーを自分で入れてすすめてくれた。窓を背にして語る彼女は目の奥から微笑が溢れでてくるようだった。終始にこやかな表情で，私にはとても早口だが明瞭な口調で語ってくれた。冗談も飛び出した。

私は「なんでもないの」のアンドレアや「新しい女」のパウリナを通して作者を想像していただけに，目の前の作者とそれがなかなか重ならなかった。私は無口な近づきがたい大柄な人を想像していたが，目の前の人は小柄で快活でユーモラスな人であった。

私は彼女への手紙で，私が彼女の作品に接するようになったのは「新しい女」を通してであったこと，そしてそれは私自身の回心にとっても重要なものとなったことを書き誌したのであった。彼女はその点に関して，自分の作品が共感をもって読まれることはどんなにありがたいか知れないけれど，回心というものには作品に表現できないなんの変哲もないところがあり，一つの作品を作るために，そこにはフィクションの入ることを語ってくれた。私にはそれはよく理解できたつもりでいる。彼女自身「新しい

女」の第二部でパウリナが神が真理であることを悟ったとき，彼女の周囲にはなんの変化もなかったと誌している。私にはこのことがよく理解できる。パウリナが架空の人物で，彼女の生活も架空のことであっても，先のことは一つの架空でないものを語っている。なんの変哲もないところで，なんの変化もないときに突然パウリナが回心したのだ。あたりにはなんの変化も起らなかった。第三部はその回心がどういうものであったかを物語として発展させるために存在しているのであろう。

「日射病」につづく作品がどうなっているかという私の質問に対して，彼女は「日射病」の序文に誌したようにあとの作品の方が先にできたが発表が遅れ，今の年令になったら主人公を殺すこともできず，全面的に書き直さねば発表できないとのことだった。

雑誌 "La Actualidad" などに連載されたエッセイについては主人の関係で書いただけで，ということで多くは語ってもらえなかった。

私は彼女の作品の一愛読者にすぎない。その私に会いたいと思ったのは私の手紙が彼女の目に「感じのよい，とっても感じのよいもの」に映ったからだと彼女は言った。私たちが彼女の許を辞するとき，彼女は戸口まで送ってきて，ふたたび「おはよう，さようなら」と日本語で言って笑った。私たちも笑った。街路にでると，建物も車も長い蔭を投げかけていた。

2

「パスクアル・ドゥアルテの家族」をひっさげたカミロ・ホセ・セラとともに「なんでもないの」によってカルメン・ラフォレーが文壇に登場し，戦後のイスパニア文学の隆盛の開始を告げたのは1945年であったから，すでにそれから二十有余年の才月が流れたことになる。その間，いろんな作品を世に問うてきた。決して多作とはいえない。しかし，多くの評論家が彼女を現代のイスパニア文学の代表者の一人として紹介し，論じてきた。それに彼女自身いろんな機会に自らの作品を解説してきた。時には評論家たちの理解と自分の描く世界との食いちがいについて述べている。私はここで，そうした作者と作品（主として小説）に焦点をあてることによって，私自身のカルメン・ラフォレー理解を整理してみたいと思う。

3

彼女は1956年に出版された "Mis páginas mejores" の序文の中で自分の生い立ちについてかなり詳細に述べている。

「1921年9月6日，私はバルセローナで生まれた。——中略——1923年満2才になろうとしているとき両親とカナリアス群島に移った。私の父は建築家で工業実技学校の教師であった。私たちがカナリアスに移転したのはこの職のせいだった。私はとても若くて，体格のいい，非常にスポーツマンの父をおぼえている。彼はパイプで喫煙する習慣で，上質のイギリス製きざみを使っていた。その匂いが，ラス・パルマスの家のろう色の廊下の匂い同様，私の幼年時代のまぎれもない匂いとして私の中に残ってきた。

私の父は北欧系（祖父はフランス系，祖母はバスク）のセビリア人の息子であった。私の父はバルセローナで勉学した。かなりの船の乗り手で自分の帆船をもっていた。若い頃ピストルの射撃のチャンピオンであったし，またわが家には自転車競争で得たカップがあった。彼は弟たちや私に水泳，不平を言わずに肉体的疲労に耐えること，島の内部へ遠足すること……そしてピストル射撃などを教えてくれた。最後のピストルでは私はいつも弟たちに負けた。

私の母はトレドの人であった。とても身分の低い家庭の娘で，初等教育は修道女経営の貧乏人の娘が行く学校でうけた。のち教職課程を履修するための奨学金を得た。私の父はたまたまトレドの師範学校で図工を教えていた頃，学生であった彼女を識った。

私の母は結婚したとき18才であった。私——この夫婦のはじめての子供だった——が生まれたとき，彼女は20才で，カナリアスで死んだ日，33才だった。その日はちょうど彼女の誕生日であった。私は彼女を小柄な，とても大きな精神力のある，非常に鋭い知性の，義務に対するゆるぎないカスティーリア的感覚をそなえた女性と記憶している。非常に気品のある女性であった。彼女のやさしさもおぼえている。生まれつき友を大切にした。ラス・パルマスにはいまも彼女を愛し，生き生きと彼女のことを記憶している人が多い。彼女は弟や私たちに誠実であり，物事を中途半端にせず，私たち自身の行為の結果をうけ入れる勇気というものを教えてくれた。私のカナリアス時代には二人の弟エドゥアルドとホアンも入ってくる。私は

いつも彼らと気もちが通い合っていたと思う。のちには継母も入ってくるが，彼女は私がどんなにお伽ぎ話を信じるまいとしても，まるでお伽ぎ話の継母のようにふるまって私にそれがほんとうだというのだった。私は彼女から幻想は現実と比較するとき，つねに貧しいということを学んだ。（これはドストエフスキーを読む前のことである。）

1939年ちょうど9月，私はバルセローナに戻り，そこで3年くらした。それ以来，マドリーに住んでいる。私はバルセローナとマドリーの両大学に通ったが，どちらも終了していない。大いに読書した。生活はいつもよい時も悪い時も私の関心を惹いた。」[2]

以上引用した部分にみられるのはカナリアス群島ですごした幼年時代の思い出が中心であるが，中でもスポーツマンとしての父の追憶と若くして逝った母への思慕の念がみなぎっている。とくに母の死は彼女の主要作品である「なんでもないの」「島と悪魔」「新しい女」などにらみれる母の不在に影響を与えているのではなかろうか。「島と悪魔」には厳密にいって母は存在するが廃人としてである。このことは短篇についても言えることで母が中心として登場する作品は「最後の夏」など数少く，ここでの母は死の宣告をうけた母である。「学校へ」の母は作者自身の母としての姿であろう。

1944年1月から9月にかけて彼女ははじめての作品である「なんでもないの」Nada をマドリーで書いた。「この小説の構想はイスパニアの内戦が終結して間もない1939年9月にカナリアス群島のやさしく平和な世界からバルセローナに到着した際に受けたショックから生まれた」[3] という。この作品は1944年度 Premio Eugenio Nadal を受賞，のちにアカデミアの1948年度 Premio Fastenrath も受賞した。先にも述べたようにこの作品によって彼女は内戦で中断されていたイスパニア文壇におどり出たのである。

ホアン・ルイス・アルボルグは「≪なんでもないの≫とセラの≪パスクアル・ドゥアルテの家族≫は中断されていたわが国の小説に新しい活躍の舞台をもたらし，わが国の文学の雰囲気にはほとんどセンセイショナルな非常に好奇心にみちたイスパニアの大衆の関心を惹きつけた本であった」[4] と述べている。これらの作品の出現が現代のイスパニア文学にもっている重要性について他の人びとも認めている。M・ガルシア・ビーニョは「1945

年以後に出版されたイスパニアの小説のあるものは質において≪なんでもないの≫よりすぐれている。しかしながら，≪なんでもないの≫の方があいかわらず目立ち，成功に輝き，たえず再版され，作者にその出現にともなった多くの状況，それは文学的なもの以上のものであったが，それがなければ彼女にとってそれを獲得し維持することがもっと困難であったろうと考えられる地位を与えている」[5] と述べている。物語はカナリアス群島からバルセローナにいる祖母の許にきた18才の学生アンドレアが1年間にそこで見出したものを1人称で物語る。祖母，叔父夫婦，オールドミスの叔母に素性のわからぬ独身の叔父から成るその家庭で彼女がみたものは孤独であった。さりげなく描かれているが，そこにアンドレアの不満と哀感が流れている。作者も言うように「なんでもないの」はひとつの激しい問いかけなのであろう。求めるものが得られず，アンドレアはバルセローナを去っていく。

彼女の二作目の長篇小説「島と悪魔」は1952年に出版されているから，「なんでもないの」から7年の才月が流れたことになる。その期間は彼女にとって実生活において非常に充実したものであったという。「私の青春時代のように，私の幼年時代のように，この私の人生が私に教え，熱い血潮で私をおおっていた。そしてどんな本の中にも決して見つけることのできなかったろうと思える深みをのぞかせ，たとえ本を書くことが私の天与の目的であったとしても，どんな本の中にも与えることの決してできないあるもののために準備していた」[6] と述べている。つまり，この時期に彼女は作家で記者のマヌエル・セレサレスと結婚し，3人の子供をもうけている。「島と悪魔」が出たとき，4人目の子供の誕生を待っていた。この7年間の沈黙――彼女は沈黙とみなしている――のはじめの3年間，つまり1946年から49年にかけて彼女はなに一つ作品を発表しなかったという。その後いくつかの記事，コントをいろんな雑誌に発表したが，そのうち短篇は「島と悪魔」後のものも含めて「少女その他」La niña y otros relatos にまとめられて1970年に出版された。この時期の作者の関心を知る上に参考になる作品集である。この作品集は表題に選ばれた「少女」La niña 以下，「楽しい旅」El viaje divertido,「呼び出された人びと」Los emplazados,「ロサムンダ」Rosamunda,「避暑」El veraneo,「写真」La fotografía,「少女時代」En la edad del pato,「学校へ」Al colegio,「最後

の夜」Ultima noche,「帰宅」El regreso,「夫婦」Un matrimonio,「クリスマス・プレゼント」El aguinaldo,「死んだ妻」La muerta の13編が納められている。

「楽しい旅」と「呼び出された人びと」は彼女がかつてきいた挿話から生まれたという。作品は多かれ少かれ作者の体験・見聞から生まれるものであろうが，とくに作者が作品成立の動機を述べるにあたってそう告白することは主としてその見聞した挿話が作品の土台になっていることを示すものであろう。私のこの作品集からうける印象ではこの二作品が一番シチュエーションの立て方，筋の運びに複雑な作者の配慮といったものを感じさせられた。作品集全体がほとんど筋といっても単純そのものの小品から成立っているところで，それをみるとき，なにか別物の感じを拭い切れない。これは彼女が分類するように短篇小説 novela corta とコント cuento のちがいであろう。例えば「楽しい旅」をみてみると，エリサとルイス，ロサ（ルイスの姉）とホセといった二組の夫婦が中心となってストーリーは展開する。エリサとロサは親類の結婚式に出かけた。前夜も洪水にあって二人の子供のうち一人を救うために他の一人を見捨てねばならない夢をみた神経質なエリサは子供を残していくことを非常にちゅうちょするが，乳呑児だけを連れていく。義姉のロサの方は快活で久しぶりに遠出を楽しみたいからと子供を家に残していく。二人はマドリーへの車中で中年男のハビエルに会う。エリサはその男がかつての内戦中父を殺し財産を奪った男だと疑い悩む。夫の母ロサリアにその悩みを告げ，彼がかつてのロサの恋人であったこと，内戦中一家は物質的に彼に助けられたことを教えられる。母から慰められたエリサは，もはや彼が父を殺した人間であるかどうか悩まない。エリサは立ち直る。一方，宴会で酔ってハビエルは暴れる。ロサはハビエルのことで絶望的になる。一方，村に残っていたエリサの夫ルイスは妻の手紙で安心し，ホセはさきに村に帰ったハビエルのひろめたデマで妻のことが非常に心配になる。そこへ二人の女が帰ってくる。エリサが気分すぐれないときロサは楽しく，ロサが絶望的になるときエリサは元気になる。夫同士についても同じことである。まるでモザイクのように４人の登場人物の気分の明暗をコントラストになるよう組立てられている。性格・体格についても同じことがいえる。例えば二人の夫はドン・キホーテとサンチョ・パンサにみたてて比較される。もう一つこの作品で注目さ

れるのはハビエルの存在である。この謎めいた経歴，かつて親しい人の恋人であったという想像もしなかった事実がある点などその性格やシチュエーションをみるとき「なんでもないの」のアンドレアの密輸する叔父と同じ人物を原型にしているように思われる。「呼び出された人びと」の方は女教師テレサと少尉パキートの恋物語である。二人のめぐり合いはまるで悪魔の仕業によるみたいである。

この作品集の各作品を眺めてみると，まず表題に選ばれた「少女」であるが，これは「実在の二人の人物，カルメン・ラフォレーが個人的に知っている少女と信心女が基になって出来上ったので挿話が基ではない」[7] という。つまり前の「楽しい旅」や「呼び出された人びと」とちがって登場人物のモデルが基になって作り上げられた作品といえよう。孤児オリビアのような幸薄い少女，孤独な少女は「なんでもないの」のアンドレアとどこか共通なものを感じさせる。作者はそうした少女の姿に心惹かれ，この物語を作り上げたのであろう。しかし，この作品は同時に当時の作者の関心事であった信心女を扱っている点で重要だといえよう。信心女カロリーナは化学者の妻であった姉の死後，その後妻となり，甥や姪の世話をする。そして暇をみつけては病院へ出かけたりして困まった人びとの世話をする。彼女は死の床についた女からオリビアという少女のことを頼まれる。その女は夫の死後，アルベルトという画家と馳落してマドリーに出てきたのであった。オビエドに夫の母が住んでいる。アルベルトはオリビアを残されて養っていけず困まっていた。そこでカロリーナはやせこけたオリビアを自宅に連れ帰る。そのため家ではカロリーナと姉の長女アスンシオンの言い争いとなる。オリビアはアスンシオンのために別の家に連れていかれるが，迎えにきた祖母に連れられてオビエドに帰っていく。

「52〜55年の間にカルメン・ラフォレーによって書かれたすべての，ほとんどすべての作品において，信心という言葉あるいはそれほど不評な文学的人物像なのに非常にやさしく扱われている信心女に出くわす。作者は多分この現象は彼女が幼時からこの言葉に感じた嫌悪に対する反動として起るのだと考える」[8] という作者の言葉が，当時いかに彼女が信心というものに関心をもっていたかを示すものであろう。「クリスマス・プレゼント」ではもっとはっきりと信心女がテーマの中心として描かれている。当時のその関心事が後の彼女自身のカトリック教会への回心と作品「新しい

女」への結実となったのであろう。

「ロサムンダ」はロサムンダという芸名で舞台で名声を馳せたのに芸術を解さない夫のために自分は犠牲になっていると信じている中年女フェリサが列車でみかけた若い兵士のやせて弱々しい姿に死んだ息子を想い出し，自分の身上を物語る。途中列車が止まった駅のバーで朝食をとろうと兵士が彼女を招待し，彼女がよろこんで受入れるまでの短い作品であるが，いくぶん常軌を逸した夢に生きる女ロサムンダは「呼びかけ」の主人公メルセデスと生き写しである。もしこの「ロサムンダ」の方が先に生まれたのだとしたら，おそらくこのフェリサ（ロサムンダ）からメルセデスが生まれたと考えられるのではなかろうか。女の哀しい姿とその女の打明け話をきいてやる青年のやさしい気もちが心に残る作品である。

「避暑」はホアン・パブロが妹のロサが女教師をしている村へ避暑にやってくる。早速散歩に出かけ，海岸で村の医者と親しくなり，はからずもその医者からロサが兄から首都へ来るように呼んでもらえるのを頼りに婚期を逸してすごしてきたこと，彼がかつて彼女と恋仲だったが，今は別の女と結ばれ，子供もいて幸せなことを聞く。ホアンはすぐにこの村を去る決心をする。ホアンは約束どおり妹を呼びよせて勉学させてやる余裕がついにできなかったのだ。彼は彼なりに苦労した。ロサはひなびながら豚や鶏を飼い，野菜を作ってそれなりに安らかに生きている。夢は実現されなかったが，それなりに生きている。それが人生かも知れないと思わせる作品である。

「写真」は貧しい夫婦がいて，夫だけがさきに移住し，妻はあとに残って息子を産む。妻は生まれた子供の写真を夫に送るために写真屋へ行く費用を稼ごうとして必死になる。彼女の手紙を中心にしてその姿が描かれる。

「少女時代」では野性的で快活な女学生クリスティーナが大人になろうとしている年頃で，神経質な物理の先生をとまどわせる。同級生の“私たち”は理想の男性との結婚を夢みたりする。クリスティーナはクラスメートにみんなの顔を動物をかりて描き，それがだれの顔か当てさせ賞品を与えるコンクールを考える。「小っさなフクロウ」とあだ名をつけられた子はあだ名だけ得て素手だった。突然クリスティーナは「あんたは7番と言ったわね」というなり，なによりも大切にしていた万年筆を彼女にやってしまった。にこりともせずにそれを受けとったその子の姿がクリスティー

ナの気もちをいっそう浮き出させているように思う。

「学校へ」は母親と娘が連れ立って外出する。子供の服装をととのえてやり，爪を切ったり，髪をなおしてやって街路に出るときはすっかり疲れてしまっている。だから祖母のところへ出かけるときはきまってタクシーに乗る。しかし今朝は歩く。学校へ行くのにタクシーには乗れない。4才の娘のためにわざわざ遠くの学校を選んだ。今まで自分と一体であった娘がこれから彼女独自の世界をつくっていく。そんな想いに浸りながら，学校へと歩く。この作品には筋もない。母親の娘に対する感慨が綴られているだけである。作者はこの作品を estampa と呼んだ。それは母と娘の一幅の画面である。「人生の一画面のようなもの」[9] と作者が言うところからみて，物語というより作者自身の感慨を綴ったものとみていいだろう。ここにはすでに母としての彼女の姿がある。

「最後の夜」は戦場を逃れるために自らを銃撃し，病院生活に入るが逃亡兵の罪に追いたてられるポールの話である。療養中に知り合った妻クロード宛の手記に誌された彼の告白によって構成されている。

「帰宅」は精神病院に入っていたフリアンが一家を養わねばならないという責任ある社会に戻って行く。彼は病院の中に安らぎを見出していたのだが。この作品は「最後の夜」同様，弱い人間に注がれた作者の眼差しを感じさせられる作品である。

「夫婦」は若い貧しい夫婦の話である。ペドロはマドリーの合唱団員のグロリアと結婚する。彼は勉学のために父が送ってくれた金銭でグロリアとの生活を楽しんできた。そして，いつか父は自分を連れ戻しにきて，美人で金持ちの娘と結婚させてくれるだろう。彼はそれを望んでいた。しかしグロリアは子供を産み，父に電報を打ったが，その返事は「私たちには息子も孫もない。手紙も懇願も無用。勝手にせよ」というものだった。困まり果てたペドロは地下鉄で5ドゥロ紙幣を拾い，それで酒を飲み，夕食をとる。帰宅して妻や子供のために自分の冬オーバーを売って費用を払った残金をかぞえていて，自分の拾った金銭が実は自分のものであったことを知る。彼は妻が妊娠したのが解ったとき，お産することに反対した。しかし彼女は「絶対産む」と主張したのだった。そのときからペドロのグロリアに対する愛が始まった。彼は結婚によって荒れはてた家と妻の青ざめた顔を得，彼女はたこのできた手，痛む背と飢えにあえぐ夫を得たとし

ても，ペドロはそこに結婚の幸せを見出す。貧しくても人を愛する幸せをそこに見出す。ここには「避暑」や「写真」同様，貧しい生活の中にも幸せを見出していく人の姿があり，それに注ぐ作者の暖い眼を感じるのは私だけであろうか。

「クリスマス・プレゼント」は先にも述べたように信心女の話である。イサベルはむすめむこのフリオに頼まれて彼が医師として勤めている病院の患者にクリスマス・プレゼントの十字架の聖ヨハネの作品をとどけにいく。その患者というのはマヌエラという40年来麻痺のために病床でくらしてきた女である。イサベルは自分が勉学し，遊び，恋し，結婚し，子供をもうけ，未亡人になり，社交や旅行を楽しんですごしてきた40年という才月の間，肉体的苦しみと孤独に生きてきたこの女が聖ヨハネの作品の真実性を見出し，それを理解できたことを神に感謝しているのを見出す。いやいや出かけた病院でイサベルは賢者の石を見つけたのである。これはむすめむこから彼女が受けとったクリスマス・プレゼントといえないだろうか。彼女は輝しい顔をして帰宅する。その理由を理解できるのはフリオだけである。イサベルの心に起ったもの，それは一つの奇蹟のようなものであろう。その輝きを他人の心に灯すマヌエラは聖女であろう。この作品は「死んだ妻」とともに平凡な社会の片すみで病いに苦しむ女が示す清い心とその清い心がその接する人びとの心の中におこす変化の物語である。名もない聖女の物語といえよう。

作品集の最後を飾る「死んだ妻」は今述べたように聖女のような女の物語である。パコは善良な男で，病床にいる妻をかかえて黙々と働く。だから彼が酒を飲むからといってだれも彼を非難したりはしない。妻の病いは悪化していった。そしてパコはいつか妻が死んだら近所の尻軽な後家と結婚しようと考えるようになる。しかし，ある日妻は小康を得て家事を手伝おうとする。その日からパコは後家のことを忘れた。妻が麻痺で倒れて以来，台所は汚れ，二人の娘の喧嘩は絶えなかった。妻は孫の着物を編んだりしていたが，死んでしまう。パコは涙も流さなかった。妻のこともすぐ忘れた。しかし二週間ばかりたったある日，家の中で死んだはずの妻を身近に感じた。そしてだんだんはっきりと妻の存在を感じるようになる。二人の娘はかつての妻がしていたように家を清潔にし，言い争いを止めた。そのために妻を想い出したのである。未婚の娘は姉の主人の給仕をし，姉

娘は子供の世話をしている。彼は娘たちが妻に似てくるのを感じ，娘たちは父が急に老いたのを感じる。妻は死んでこの家庭を守り，この一家の人びとの心の中に生きつづける。作者は「死んでのちに，みんなを慰めるために……」という言葉でこの作品を結んでいる。

以上13編のうち，「少女」「呼び出された人びと」「楽しい旅」の3編を作者は短篇小説と呼び，他の作品はコントと呼んでいる。

1952年彼女は「島と悪魔」La isla y los demonios を発表した。この作品は彼女がその子供時代をすごしたグラン・カナリアが舞台である。彼女は「その主要テーマ，私にそれを書かしめたものはずっと昔私にのしかかっていた重み，グラン・カナリア島の地で私が若い日にみた恐しい，特別な，ぎらぎらした魅惑であった。荒涼とした岩山と花の溢れた柔い岩かげ，いつも風に打たれている長くつづく断崖のある乾いた土地」[10] と述べている。この表題の「島」によって，彼女の大切にする想い出にまつわる土地と時代を，「悪魔」によって人間の情熱を表象したようである。この物語は作者のいうように「若い女性の数ヵ月の間の夢，目くらみ，直観，きびしい現実との衝突」[11] を通して思春期の少女の成熟を描いたものである。この作品についてはすでに別の機会に触れた[12] が，その舞台になったグラン・カナリアの土地に注目したい。ここは彼女がいろんな機会に触れたように彼女の幸せな時代を表象するところのようである。彼女の作品にとって実在の土地がこれほど重要性を帯びるのは「なんでもないの」に対するバルセローナぐらいではなかろうか。他の作品では実在の土地はそれほど作品の成立に重要性を帯びない。「新しい女」の場合作者はわざわざ架空の土地を設定したと断っている。

この「島と悪魔」と次の第三作目の長篇「新しい女」が出現する1955年までの間に彼女は「呼びかけ」La llamada,「婚約」Un noviazgo,「最後の夏」El último verano,「ピアノ」El piano などの短篇小説をものし，1954年「呼びかけ」という表題のもとに1冊にまとめられて出版された。彼女はチェーホフやアンドレイエフの名をあげて，短篇が決して長篇に劣るものでないと断言しながらも，どちらの形式で作品を書くかは作者の好みによるとし，彼女の場合は長篇だという。また作品の分量はしばしば出版社の都合によってきたと打明けている。[13]

「呼びかけ」は旧知の老人の訪問をうけて，昔夢みた女優の道へふたた

び立とうとして失敗する中年女を描いたものであり，「最後の夏」は余命いくばくもない母に，長い間の夢であった父との避暑旅行をさせるべく子供たちが金銭の工面に苦労する貧しい一家の物語であり，作者は私への私信の中でこの作品に触れ，「この短篇小説は私の他の短篇同様，イスパニアに存在した20年あるいは25年以前の一時期，一問題を扱ったものである」[14] と語ってくれた。つまり戦後の転換期を扱ったものである。「婚約」は女の性格の故に破れてしまう婚約について，「ピアノ」はピアノにまつわる若い夫婦の姿を描いたものである。

1955年「新しい女」La mujer nueva が出版され，1955年度 Premio Menorca, 1956年度 Premio Nacional de Literatura をそれぞれ受賞した。

「この小説の主題の動機になったのはカトリック信仰への私自身の回心（1951年2月）であった。この信仰は私にとって当然のものと考えられよう。なぜなら，私は生まれたとき洗礼をうけたからである。しかし私は幼時をすぎてのち，決してふたたびこの信仰を気にかけることはなかったし，その勤めを果たすこと――それは私にとってかびくさい無意味なものであった――を全くやめてしまっていた。

私はこの小説において――まさに私の体験に基づいている故に――恩寵の突然の知覚以外あらゆる自伝的なものを避けた。私は私自身のタイプとは全く異なる女性のタイプを主人公として創造し，彼女を私のとは全く異なる回心と精神的闘いの状況の中においた」[15] と彼女は誌している。

マドリーのオドンネル街の自宅でこの作品について彼女が言おうとしたのはまさにこの事であろう。彼女は自らが体験した回心という問題の上にこの架空の物語を構築したといえる。登場人物に作者がいるのでなく，その回心という体験に作者がいる。この作品の内容については，数年前「パウリナの回心――カルメン・ラフォレーの小説「新しい女」を中心に――」[16] という小文の中で触れた。ただここで私の心にかかるのはジードの「窄き門」との相違である。信仰のために実生活を捨てるアリサと信仰のために実生活に飛び込んでいくパウリナのちがいである。それは何に起因するのであろうか。この二人の女性のおかれているシチュエーションの相違にもよろう。しかし，根本的には信仰そのものに対する作者の見解のちがいから発しているように思う。それはアリサの魅力や人間的美質とは別問題である。俗世間的な生活の中での愛をパウリナに選ばせた点

にカルメン・ラフォレーのカトリック作家としての見解があるといえよう。

以上みてきたように，彼女の作品は，あるいは彼女の見聞したストーリーをモデルに，あるいは登場人物のモデルを基にしてストーリーを創造し，あるいは体験した問題をテーマに作られてきた。したがって，それぞれの作品が架空の，現実とは独立の世界でありながら，作者の過去，あるいはその時代の関心事をほう沸させる結果となってきた。彼女の作品の特徴をドキュメンタリー性にみようとする人たちの見解はそうしたところからくるのかも知れない。

そうした今までの作品の傾向から全く離れて小説の世界を築こうとしたのが，1963年に三部作の第一部として発表された「日射病」La insolación である。

4

以上，主として彼女の小説を中心に，作者と作品のかかわりに焦点をあててみてきた。そこで考えられることは，彼女の力点はやはり「なんでもないの」「島と悪魔」「新しい女」などの長篇小説であり，それはそれぞれの作品成立時の彼女の関心事の結実であったということである。またそれらの長篇作成の合い間を縫って生まれた諸作品に長篇が完成されていく素因がうかがえるということである。前にも挙げたように，「少女」「クリスマス・プレゼント」「死んだ妻」などでの作者の信仰に生きる人への関心は「新しい女」の回心へと発展するものである。

これらのことは彼女の作品を時代を追って辿り，その制作過程を眺めるとき，作者の心の遍歴をたとえその一部であろうと，かいまみているように思われる。それだけに，私は「島と悪魔」「なんでもないの」「新しい女」からそれぞれの主人公のちがいがありながら，女の生涯の夢み，問いかけ，見出すという一連の流れを見出し，そこに作者の経歴と重なるものがあるため，いつの間にか作者が創造した人物を作者自身と錯覚してしまうことになるのであろうと思う。それが現実の作者に会ってうける印象と作品から勝手に想像していた作者像とが重ならない原因であろうと思う。「私は私自身のタイプとは全く異なる女性のタイプを主人公として創造し，彼女を私のとは全く異なる回心と精神的闘いとの状況の中においた」とい

う彼女の言葉を想い浮かべる。作者は体験した問題をテーマにしながら全く架空の物語を創造した訳である。

また作品を通じて言えることは社会の片すみに生きる名もない人間の生活に対する作者の暖い眼差しがあるということである。それは彼女の人生への愛からくるのであろうか。

「人生は，彼女の信じるところによると，彼女に多くの満足と悪いことに対しては記憶の悪さというとても重要な能力をくれた。多分それ故にその性格はむしろ楽天的なのだ」[17] という自分自身の 性格 についてのカルメン・ラフォレーの言葉は，彼女の作品の性格をも言いあてているように思える。

5

「日射病」にはここでは全く触れなかった。これは将来論じられるべきものであろう。

彼女は他にノゲル社から出版されているイスパニア各地の写真入り案内書のグラン・カナリアの巻にその彼女の第二の故郷についての解説を行なっている。その他，多くの記事を彼女は諸雑誌に発表してきたが，私は不幸にしてまだよく知り得ずにいる。

1965年彼女はアメリカ合衆国の国務省の招待で北米を横断し，その時の記録が旅行記「北緯35度」Paralelo 35 となって1967年出版された。

1967年彼女は鉄のカーテンを越えて旅行し，その時の記録も残している。

将来，こうした小説外の彼女の世界を探っていきたいと思う。

最後に，彼女はあちこちでリルケ，ドストエフスキー，ピオ・バロハ，ラモン・J・センデルなどの名を挙げているが，これらの人びととの関わりについてもいつか探ってみたい。そこにカルメン・ラフォレーという作家とその作品をよりよく理解する一つのてだてがひそんでいると思えるからである。

テキストとして次のような彼女の作品を使ったが，それが今まで私が手にした彼女の作品のほとんどすべてである。

Nada, 15ª ed., Ediciones Destino, Barcelona, 1965

La isla y los demonios, 4ª ed., Ediciones Destino, Barcelona, 1964

La mujer nueva, 6ª ed., Ediciones Destino, Barcelona, 1964

La llamada, 2ª ed., Ediciones Destino, Barcelona, 1956
La insolación, 3ª ed., Editorial Planeta, Barcelona, 1963
Paralelo 35, Editorial Planeta, Barcelona, 1967
Mis páginas mejores, Editorial Gredos, Madrid, 1956
Gran Canaria, Editorial Noguer, Barcelona, 1961
La niña y otros relatos, Editorial Magisterio Español, Madrid, 1970
Novelas Tomo I, 8ª ed., Editorial Planeta, Barcelona, 1970

(註)

1) *Paralelo 35*, pág. 229
2) *Mis páginas mejores*, págs. 9—11
3) Idem. pág. 13
4) Juan Luis Alborg: *Hora actual de la novela española* I, Taurus, Madrid, 1958 pág. 131
5) M. García Viño: *Novela española actual*, Ediciones Guadarrama, Madrid 1967, pág. 77
6) *Mis páginas mejores*, pág. 37
7) *La niña y otros relatos*, pág. 9
8) Idem. págs. 9—10
9) *Mis páginas mejores*, pág. 37
10) Idem. pág. 57
11) Idem. pág. 57
12) "Hispanófilos" No. 11 (1968. 11) 掲載の拙稿「私の好きなスペイン作家——Carmen Laforet——」
13) *Mis páginas mejores*, pág. 91
14) 1970年11月11日付書簡。
15) *Mis páginas mejores*, pág. 208
16) "Más y Menos", No. XXIII. 1965—6, págs. 41—50
17) *La niña y otros relatos*, págs. 13—14